Pichari ～ピチャリ～
七飯町歴史館だより
第158号

ななえ古写真物語
VOL.158

地域の寺院

明林寺のはじまり

昭和４０年代

峠下地区

古くは宿場町として知られた峠下地区。その切り開きは、１７４０年頃と考えられ、子之助、宗四郎、吉五郎、佐治兵衛の４人によるものと伝えられている。その後、明治維新時には、箱館戦争勃発の地となり、関連する史跡や戦死者の墓が残されている一方で、現在は、道の駅「なないろ・ななえ」や男爵ラウンジが建ち並び、さらには温浴施設の建設も予定されているなど、七飯町の中では、近年開発が著しい地域である。

峠下地区の古き姿を示す資料としては、安政年間（江戸末期）に描かれた第５号七飯町指定文化財の「峠下村絵図」があるが、その中には、峠下周辺で既に水田があったことや、寺社をはじめ庚申塔といった信仰に関する建造物が描かれ、今は使われなくなった字名なども記されていることから、町の歴史を示す資料として大切に保管されている。

この絵図の中に描かれている唯一の寺は「一行院」である。昭和４４年発行の『峠下郷土誌雑記』の記録によると、１８２１（文政３）年に古峠観音山の麓に、有珠善光寺の末寺として「一行庵」という名で開かれたが、無住であったという。

その後、明治１１年には春日左ヱ門の娘お嘉代が、江戸在住の頃の女中お仙とともに一行庵に住み着いて尼となり、明治１８年に亡くなるまでここに在住したという。翌明治１９年には内山明林と称する尼が、越後より３名の弟子を連れてここに在し、明治２９年に寺号を得て「明林寺」と称するようになったという。

また、現在の国道５号沿いへ移ったのは明治３２年のことで、以降、今に至る。『七飯町史』によると、歴代住職は、開山 函館高龍寺十八世大光海雲大和尚、二世 井上月橋大和尚、三世 高橋顕秀、四世 国下光雲、五世 三浦徹玄とあり、さらに昭和３年に行われた釈尊涅槃会逮夜の際、火災となり重要な文書類のほとんどを消失したという。

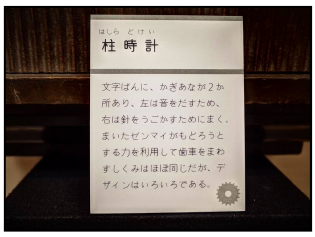
このように、一行庵にはじまり、一行院、明林寺と変遷した峠下地区の寺は、その後も地域の檀家に支えられ今日に至っていることは、地域住民による普請の様子を撮影した写真があることからも想像できる。昭和４０年代に撮影されたものと考えられる上の写真は、現在とは少し趣が異なるかもしれないが、移りゆく町の姿を記録するひとつの史料として、当館で末永く保管され続けるだろう。

日進月報

＜2021.2＞

企画展『回展』を開催中です。

今月１７日から３月２８日（日）まで企画展『回展』を開催しています。タイトルを見て内容がすぐに想像がつくでしょうか。副題は「まわす道具、まわる道具」。現代はボタン一つで幾多のことを短時間で可能にする時代です。しかし、少し前の時代は、そうではなかったはずです。例えば、展示している「ダイヤル式黒電話」は、数字が書いてある穴に指を入れ、指止めまで回して離し、信号を伝え、相手と話すことができました。柱時計は、ネジを回さなければ動かないので、定期的に行う必要がありました。動力の変遷を追いながら、「食」「くらし」「娯楽」「農具」などに分けて展示をしています。解説文はお子様でも読めるように、なるべくわかりやすく、平仮名を多く用い、工夫をしました。また「手回しのサイレン」は、ハンドルを回し、音を体感できます。「唐箕」もハンドルを時計まわりに回し、風を送る仕組みを学べます。期間中は無休です。是非足をお運び下さい。



お雛さまを展示しています。

ロビーで明治期、大正期、昭和初期のお雛さまと磁器や木製、まつぼっくりで作られたものを展示しています。例年なら常設展示室内につるし飾りなどと共に展示しておりますが、今年は少しコンパクトに置いています。各時代で装飾品やお顔の表情などがわずかに違います。年に一度の華やかな季節飾りは、後世に残したい年中行事。ちなみに江戸時代には、ひなまつりに金魚が飾られたことがあったそうです。

3月の予定

1	月	企画展「回展」開催中
2	火	
3	水	
4	木	
5	金	
6	土	
7	日	
8	月	
9	火	
10	水	
11	木	
12	金	
13	土	
14	日	
15	月	
16	火	
17	水	
18	木	
19	金	ピチャリ159号発行
20	土	ジュニア探検クラブ
21	日	
22	月	
23	火	
24	水	
25	木	
26	金	
27	土	
28	日	企画展「回展」最終日
29	月	
30	火	
31	水	

※　3月の休館日はありません

雪　下　駄

寒さを防ぐ爪掛けと両歯には滑り止め。防寒のために台に畳表をつけたものもありました。

編集後記　～tawagoto～

雪がやまない。もうすぐ3月だというのに、冬真っ盛りな積雪である。おかげでエサを探しまわる鳥たちで当館のバードテーブルは連日にぎわう一方で、窓下の落雪が人の背丈ほどにもなってしまうので、定期的に人力で排雪しなくてはならない。あまりにも雪がやまない日々が続くと憂鬱になる。そろそろ暖かな日々が訪れるはずだと自分に言い聞かせてみるが、かわらず舞い落ちる雪を見て、腰が悲鳴を上げる。それが私の冬である。（やまだひさし）

Pichari ～ピチャリ～
第１５８号
令和3年２月20日発行
七飯町歴史館

〒041-1193　亀田郡七飯町本町６丁目１－３
電話 0138-66-2181 FAX 0138-66-2182
E-mail : rekishikan@town.nanae.hokkaido.jp